日本百將傳一夕話

一

へ13
3566
1

3566
1

日本百將傳一夕話

早稲田大學圖書館
昭和3.6.3
藏書

日本百將傳一夕話序文

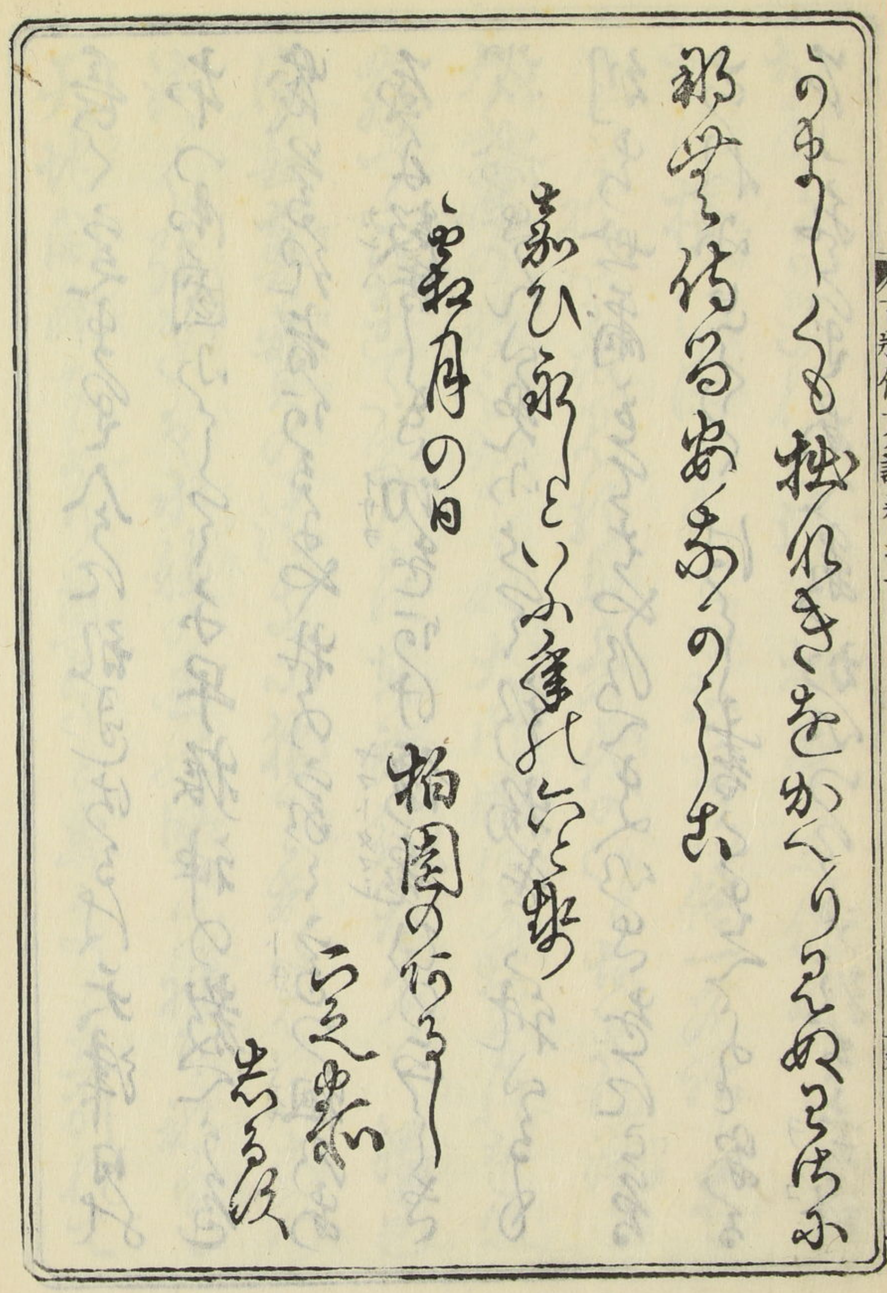
早稲田大學圖書館藏書

日本百將傳一夕話序文

安乃浪はたひらく世の墓原に中
津國内に生てる青人草乃はやふる夏
下指八十系八百弟の爾弓の武士に八中
氏川の流を汲たえ仏を有水流抑昔鎌
迫き世の人々の鎌波庫に生ん者の拳
動を形蒼ひるる文と義数多乃るる中
示彼の器に生んかもを一百將傳のいと

おのれらこの宮にまつれる此家松亭定保朝臣なり
かに擇ひ添まて日本百物語一名話と号
けらる社なる我ら祖母ふつ代のことを古さに海
大八嶋の形をなすゆゑ大印國俗の物語れを
箱つらまてるらに其所引出ふく渡
海を真寶の清き物とあるを出
清く強きを水縄の出る社を新
天地開闢てより尊きと卑きと出別れて

長くうとまを人に乱まはるは天津日
本の御國ふくて千早振神の教へうを
我等見記旨行るやゆ性の家く言つ風のあ
原の穀蕃き切をいけ優魂ひの二つき
我物ふん見ふとて新物を社るも
別ち世爾をてもやゆ乃へまふるを
古れふとくく はく書くをてとある
年和をあく彩かれつる新古義洋



自叙

和漢三才圖會載林道春先醒者謂童名於菊松丸焉藤原信時之子也爲伯父理齋吉勝之養子孩提岐嶷讀書年甫八歲側有人讀太平記者聞之能暗人感其記憶不凡十三歲而改名又三郎信勝入建仁寺大統菴就古間長老

讀羣書翌年作長恨歌琵琶行鈔解僉
言神童也因勸出家然掉頭歸家遍讀
四庫書二十二歲而所歷覽書凡四百
四十餘部從見多諳誦謁惺窩而偶床
上有論語大全開之乃問數條惺窩辨
拆之且曰所問我亦十餘年前嘗有此
疑以喜其志焉或日讀春秋傳惺窩寄

書曰古人讀春秋於羅浮羅浮者是不
在羅浮而在足下明窻淨几之上爾後
呼道春稱羅浮山人此時既二十三歲
也達識穎悟非常人也所著書百四十
餘部明曆三年正月廿三日卒年七十
五也曾著書中有本朝百將傳上古
神武東征之元帥始道臣命至于慶長

年間終豐公各雖俾附其小傳以便童
蒙矣然簡易而不能無遺憾故謀與浪
華書肆羣玉堂肇大書羅先生之文解
之國字間亦竊加新說畫圖以布世雖
然寡聞固陋啻恥大方之嘲云皆嘉永
甲寅陬月松亭迂叟題 并書

日本百將傳一夕話前集五卷標目

○壹之卷

道臣命
大彦命
武淳川別
吉備津彦
日本武尊
御諸別王
道主命
上野八綱田
武内宿禰
大矢田宿禰
田道

○貳之巻

大伴金村
大伴狭手彦
阿部比羅夫
市多來津
高市皇子
村國男依
大伴吹負
大野東人
藤原藏下麻呂
坂上苅田麻呂

○三之巻

坂上田村麻呂
文屋綿麻呂
藤原利仁
藤原忠文

平貞盛
藤原秀郷
小野好古
源經基
橘遠保
源満仲

○四之巻

平惟茂
源頼光
源頼信
源頼義
源義家
清原武則

○五之巻

源義光
藤原清衡

平正盛
源為義
平清盛
源義朝
源為朝
源義平

日本百將傳一夕話前集五卷目次畢

日本百將傳一夕話卷中總目錄

卷之六
○源頼政
○平重盛
○平教經
○源義仲
○源頼朝
卷之七
○源義經
○上總廣常
○千葉常胤
○和田義盛
○梶原景時
卷之八
○畠山重忠
○土肥實平

○三浦義澄
○小山朝政
○佐々木盛綱
○平泰時
○足利義氏
○平時頼
巻之九
○護良親王
○源尊氏
○源義貞
○楠正成
○那和長年
○赤松圓心
○宇都宮公綱
○源顯家
巻之十
○楠正行
○源義助
○足利尊氏
○細川定禪
○赤松則祐
○桃井直常
○山名時氏
○新田義興
○菊池武光
○楠正儀
○足利基氏
巻之十一
○源義満
○細川頼之
○大内義弘
○畠山基國

○上杉憲實
○細川勝元
○山名宗全
○北條早雲
○三好長慶
○毛利元就
○北條氏康
○武田信玄
○長尾謙信
○齋藤道三
○織田信長
○織田信忠
○柴田勝家
○豊臣秀吉

巻之十二

總目録畢

日本百將傳一夕話總撰目

○壹之巻

○道臣命
○大彦命
○武渟川別
○吉備津彦
○日本武尊
○御諸別王
○道主命
○上野八綱田
○武内宿禰
○大矢田宿禰
○田道

○武之卷

○大伴金村
○大伴狹手彦
○阿部比羅夫
○朴市多來津
○高市皇子
○村國男依
○大伴吹負
○大野東人
○藤原藏下麻呂
○坂上苅田麻呂

○三之卷

○坂上田村麻呂
○文屋綿麻呂
○藤原利仁

目錄

○藤原忠文
○平貞盛
○藤原秀郷
○小野好古
○源經基
○橘遠保
○源滿仲

○四之卷

○平惟茂
○源頼光
○源頼信
○源頼義
○源義家
○清原武則

○五之卷

○源義光
○藤原清衡
○平正盛
○源為義
○平清盛
○源義朝
○源為朝
○源義平
○六之卷
○源頼政
○平重盛
○平教經
○源義仲
○源頼朝
○七之卷

○源義經
○上總廣常
○十葉常胤
○和田義盛
○梶原景時
○八之卷
○畠山重忠
○土肥實平
○三浦義澄
○小山朝政
○佐々木盛綱
○平泰時
○足利義氏
○九之卷
○平時頼

○護良親王
○源尊氏
○源義貞
○楠正成
○那和長年
○赤松圓心
○宇都宮公綱
○源顯家

○十之巻

○楠正行
○源義助
○足利高經
○細川定禪
○赤松則祐
○桃井直常

○山名時氏
○新田義興
○菊池武光
○楠正儀
○足利基氏

○十一之巻

○源義滿
○細川頼之
○大内義弘
○畠山基國
○上杉憲實
○細川勝元
○山名宗全
○北條早雲
○三好長慶

日本百將傳一夕話全部十二卷總摠目畢

○十二之卷

○毛利元就
○北條氏康
○武田信玄
○長尾謙信
○齊藤道三
○織田信長
○織田信忠
○柴田勝家
○豐臣秀吉

日本百將傳一夕話卷之壹

東都　松亭金水謹撰

目録

○道臣命
○大彦命
○武淳川別
○吉備津彦
○日本武尊
○御諸別王
○道主命

○上毛野八綱田
○武内宿禰
○大矢田宿禰
○田道

以上十一將目錄終

高皇産靈尊五世孫天押日命ノ后大伴氏之遠祖也

道臣命

人皇第一神武帝の時の人
嘉永六丑迄二千四百三十四年に成

道臣命者神武東征之元帥也本朝武將之權輿乎

初め日臣命と号す神武帝東の國あることを知ろしめし人軍式紀し伝代しをひて竟に大和国橿原の郡しるすこの時命元帥の撰び出す人元帥を俗ふい軍師なり智謀勇悍衆ふまぐることく君を補佐して草創の功をなすこと則本朝武將の權輿なり

道臣命の話

神武帝い御諱と神日本磐余彦天皇と申せ。御父い菁不合尊。御母い海幸之小女。玉依姫なり。四年十五ふ立て太子となりぬ。日向の国吾田邑吾平津姫を娶て妃とす。御年四十五歳の時諸の兄及び等を聚めて豊葦原瑞穂国い高皇産霊尊。大日霊尊より。つぐ天の祖彦火瓊々杵尊ふ授けさせ給へる国ぞ。瓊々杵尊天の岡と開き。雲路と披て戾止ぬ。是時運荒ふ属て草味ふ種るふより。さぐ広きと養ひて。西偏ふ治まる。當下より今ふ及びて。年を歴ること一百七十九萬二千四百七十餘年ふなりぬ。考るふ遼邈の地。いまだ王澤ふ浴せず。我ふ聞く盍老翁ふ曰く。東ふ美地あり。蓋六合の中心なるか。此ふ都と定めんと。諸人い如何ふと宣ふ。諸の皇子等。理実なり。我とも恒ふ是と想ふ。迷ふ行ひ之と。甲寅の歳冬十月辛酉の日。天皇親ら皇軍を帥ひて。日向と進發しぬ。

筑紫の宇佐の岡の水門ふ到る。更より安芸ふ埃宮ふ居ること三年。とゝまて舟楫を備へ兵食を蓄へて。戊午年皇師雄渡の海ふ出ぬ。更より河内ふ草香邑と経て。竜田ふ赴んとす。その路険して並行ること得ぬ。ゆえ膳炊山と喻んとす。時長髓彦是を聞て。孔舎衛阪ふ徼て待む皇軍これと戦ふ。五瀬命流矢ふ中て。皇軍大ふ敗れぬ。天皇深く憂へ。熟思慮ふ。朕を日神の孫ふして。日ふ向ひて虜を征ぬ。是天の道ふ逆まり。退きて神祇を祭て。日を負て征さんふ。双ふ血ぎ〻して平ぐべし。と。群臣と然て〻軍を纒めて引返す。敵ふまて敢て逐ず。かくて軍を整へ名草邑ふ至て。紀伊名草戸畔を誅す。熊野の神邑ふ出て。天磐盾或説ふ盾い舟の傳なりん。ふ登て。軍を引て進む。邪ふ海中ふ暴風起て。皇舟漂蕩。時ふ稲飯命剱を抜て海ふ入て。鋤持神と化為。三毛入野命は浪秀を踏て常世郷ふ往ぬ。天皇偶皇子手研耳命と。軍を帥て熊野の荒

群玉堂藏板

群玉堂藏板

坂の津ふ至て。丹敷戸畔を誅しゑ時ふ神毒気を吐て人咸病ふ染む。故ふ皇軍進むことを得ず時ふ熊野の高倉下とゆう人天照太神の夢想ふより。庫の内ふ劔式を得て。こまを天皇ふ献る。この時天皇熟睡しゑ人は月見えてかの毒気ふ中てこゝる軍兵こゝろ癒う。因て皇軍進まんとせるふ。険絶ふて行べき道なく。捿遑てそゝる所をゝゝびこゝろ夜天照大神。天皇ふ刻へて曰く。朕今頭八咫烏を遣して。郷導をなさしめんと若ゑ。果して頭八咫烏空より翔降る

謹按るふ頭八咫烏のこと諸説區こゝろ。或ひは人の名とし。実の鳥とし。然るども神代ふ八岐蛇を名雄るどこゝろ人の名なり。頭八咫烏も是とゆふ。翔降とゆふゝ文の潤色ゝ。賀茂縣主の遠祖建角身命の化せる所ゝとゆひ。また 神武紀軍功を賞しゑ人條ふ頭八咫烏もまた賞列ふ入る。其苗裔即葛野主殿縣主部是也とゆふ。実の鳥ふあゝざるゝ明けし

この時月弦命。元戎を率て。烏の向ふ所を仰視て進て遂ふ菟田の下縣ふ至て啓行けり。因て月弦の功を賞しゑひて。道臣と更めゑ。かくて兄猾茅猾を徴ゑふ。弟猾糸を。こゝ兄猾め兵を揉て皇師を防んとし。怒るふその威勢あるを雖を。表ふ帰順の色を彰し。謀をなして。天皇を撃奉らんとし。頼くゆふく備式ゑ人とゆふ。茲ふ於て天皇道臣命を遣しゑ。その逆状を糺せゑ人道臣命ことを奏るふ果して逆心あるふより。大ふ怒て責て兄猾を斬る。その所を号て菟田の血原とゆふ。かくて諸の虜どもを平げゑひ八十梟を国見丘ふ斬る。皇軍大ふ振ふこゝ時。天皇密ふ道臣ふ勅し。如此く虜尽るとゆふ。その黨猶繁くゝその心測て難し。汝大来目部を帥て大室を忍坂邑ふ化て饗宴を設て是を図まと宣ふ。道臣詔をうけて。膏を忍阪ふ掘て。猛卒を撰て虜と雑へ居らゝ。酒酣ふ及び吾歌を謡ふ。是を相号て虜を刺せと示し合せ。既ふ謡

計の如くなすに虜い曾て是を知らず。與に素戔嗚尊を紀て歌に猛卒を起て虜と悉く亡しぬ。その後兄磯城及び長髓彦と伐平げまひ。高尾張の邑に土蜘蛛を誅しぬ。その人となり分長く手足長く強力にして軍衆の網を結びて害を掩ひ殺すこと。かくて皇師に伏せざる虜悉く亡び。天皇大に悅びまひ。己未年三月畝傍山の東南橿原の地に帝宅を經營しぬ。周て勲功の諸將を賞し。道臣命に命じ。築坂邑に宅地を賜ひてこれに居らしめ

道臣命の贊に曰

憶昔際會風雲。瞻靈鳥導皇軍。附鳳彩攀龍文。開國佐命元勲

この贊國史略に見えたりかの書の作者音博士添松苗也凡例に國贊と稱するものは先大史の著はせし外青雲國贊也とあり。以上廿八人あり

孝元帝第一の皇子にして崇神帝の后御間城入彦命の又故に活目入彦五十狹茅天皇及び五十狹茅命國方姫命千々衝倭姫命倭彦命五十日鶴彦命等の外祖父なり阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狹城山君・鉗宗國造・越國造・伊賀臣・九十七族の始祖也

人皇十代 崇神帝の時の人 嘉永六丑迄 千九百三十五年成

大彦命

崇神朝為北陸將軍

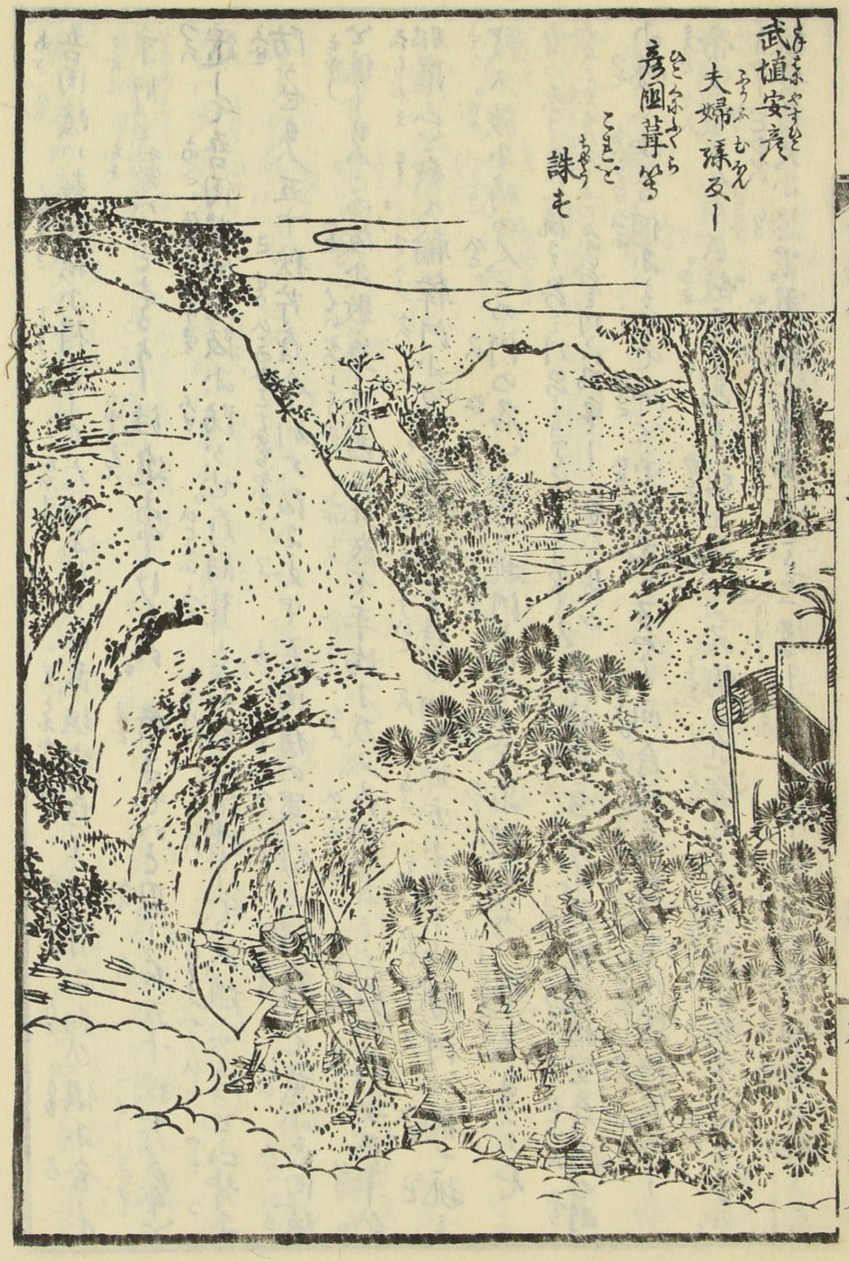
時聞武埴安彦叛而回自道率兵討之殺武埴安彦於泉河

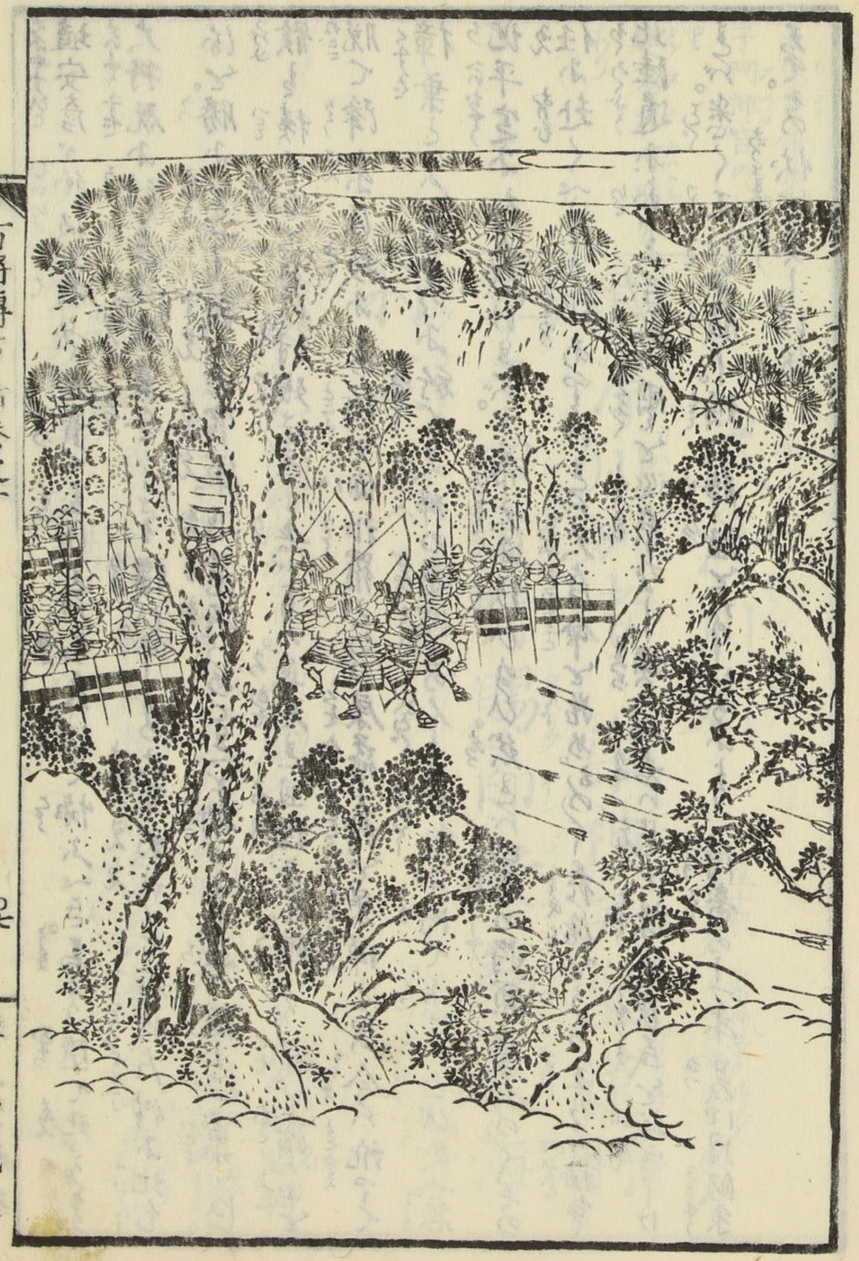
崇神帝は韓御間城入彦五十瓊殖天皇と申す 開化天皇の第二の皇子なり 後に即位ましまして五年疫病行はれて民死亡多し 周て神祇を祭りこの災ひ鎮まらんことを思ひ遠き境いまだ王化に服せざるをうれひ十年秋九月詔あり將軍を四道に遣す 四道とは北陸東海西道丹波なり 將軍の号を授けられ

大彦命の話

北陸将軍の詔を受て既に花洛をうち立。和珥坂の上に到る（大和の国添上郡）時に一人の少女ありて歌を謡ふをきくに。瀰磨紀異利寐胡播耶。飫廼餓烏塢志齊務苦農殊示勾。志羅珥比賣那素寐殊望とうたふを大彦命怪ミ咎めて少女を呼び汝何をいふやと問へバ少女對へて。ことに言ふことなし。只歌を謡ふのミといひて。再びその歌を謳ひしが。忽地に見えずなりぬ。大彦不審ミ思ひ速に花洛に皈て。帝にこのよしを奏しけるに。其の意を解さんとて帝の伯姑に。倭迹々日百襲姫命といふ在しけり。この人聡明にしてよく未然を察しあるが。是を聞て思慮をめぐらし。是ハ武埴安彦が謀叛の表ならん。其が妻吾田媛密に来て。香山の土をとりて領巾頭に裹ミ。是倭国の物實と祈て皈りしと呪く。是謀叛の驗なり。早く圖ずバあるべからず。大なる災ひあらんと奏しあへ折しも果して武埴安彦謀叛を発し妻の

吾田媛ハ数百孩に将として大阪にむかひ武埴安彦ハ山背に向ひ倶に合して京師を襲はんとするより注進ありけれバ。帝さてハと思しけ五十狭芹彦命を遣して吾田媛を大阪に防がせ。彦國葺と大彦とを遣して武埴安彦を山背に防がせらる。五十狭芹彦命則大阪にゆきて吾田媛の軍勢と接戦して竟に吾田媛を誅しあへ。その故に敗卒東西に北散て平均に及ぶ。彦國葺と大彦ハ精兵を率ひ那羅山を踰て輪韓河にいたる。當下埴安彦も河の彼方に屯し。兩勢河を隔て挑ミ戦ふ故に時の人その河の名を更て。挑河といへり。今泉河といふは訛まるなりとぞ（みやこに出てけハその余りを川の間に流るゝ[illegible]歌山）其他古言あり。再説武埴安彦河の向に陣し。汝等何によりて師を率ひ来るやと問。彦国葺對へて。汝謀叛を発し帝を傾けんとせし故にこそ詔を受てこの所に進発せり。速に誅に伏せと呼はりけれバ。埴安彦大に怒り。軍勢を指揮してまづ一揉に責たてんとせし時に彦国葺の射る矢


武植安彦
夫婦
彦國尊
誅も



埴安彦が狗奴ふ羽ぐら責て立けまべ。伯ふ仗て怖ふべき。馬より墮て死ぐるり。
大将既ふ対まそん。残黨金ぐるる憤ひさ。りの大軍敗れ。右往左往ふ北を
ふと。勝ふ乘ぜ。数千の官軍。逃蒐逃つあとを斬ふぞ。血ハ流まて泉とな。
骸を積て丘とみん。討残さまし。老どもハ且恐ま且慄きて。褌より屎を落し。甲を
脱て降参ん。故ふその所を伽和羅とん。屎落し所と屎褌とハ今ハ訛て
樟葉とハとぞ。ふ所て史婦の逆徒。ふ人ぐが功勲ふ周て。悉く亡び失せ怨
地平定ふ。ちよびけまべ。帝大ふ歓びなひ。然まべ四道の将軍等。あの〳〵その
任ふ赴くべしと詔あけまべ。大彦命を始め。あの〳〵義落をうち立るが。福ま
北陸道ふ向ぐ。かの国を巡系なし。頃ハぬ老ハ是を殊し良民を撫育しけ
まべ。悉く王化ふ服し。頃ふ静謐となりけるふより。
ちて。その状を奏しけふ

人皇十代　崇神帝の時の人
嘉永六五迄　千九百三十五年ニ成

武淳川別

大毘古命第一れ子阿部臣の祖ふ建沼名河別とあり

武淳川別者　崇神天皇遣ニ将軍于四道時賜ニ印綬ニ為ニ東海将軍一

印綬とハ大将軍のあるしなり唐山ふても大将ふるものふ印綬
賜ふとハとて古くより見ん。四十三年後本朝の御大将軍ふ賜ふ綬と
賜ふとあり武人いとく大将とふ給と振とき。その者とて衛所の
軍兵弛集まるの為ありとん。

舊事記神名ハ吉備津彦吉備津姫と云へり

本文吉備津彦ハ孝靈天皇の皇子五十狹芽彦命と也弟稚武彦命也吉備臣之始祖也

吉備津彦

年歴古今一

吉備津彦者崇神駅寓遣將軍於四道時此人為西道將軍

吉備と云ふは備前備中備後の總名なり應神天皇の紀ハいへく二十二年吉備ハ幸を吉備の國を割て御友別之子と封ぜ川嶋の縣を分て長子稚速別と封ず是下道の遠祖吉備大臣上道の祖を以て中ハ仲彦と封ぜ是上道臣香屋臣の祖也三野の祖也三野の祖を以て弟彦と封ぜ三野臣の祖也と云と吉備宮社傳ハ孝靈帝の三子其一ハ備前の一宮其一ハ備中の一宮其一ハ備後の一宮云と云へり

武淳川別吉備津彦の話

あの〳〵將軍の任ハ赴さのひ不順のものを伏し。國の政を授て。同　帝の十一年春洛ハ帰ものひ吏より後邪ヘ事ハ。帝六十年七月。群臣ハ詔しそもし天孫ろ忍ヘ降孫のとき。武日照命が天より將来ものし所の神宝今出雲ハ大神の宮ハ蔵ろ。朕とまを云へり。欲ものし。維ろ使ろて是と齋ー未らんやとあまをけるハ。群臣ハ對へて。武諸隅矢田部造のこと。箇様のこと心得ものと。渠ハ御使ろて召せらもんと然るべしと言ーけもべ召てこのこと命ー。武諸隅詔をうけて出雲ハ赴き。物部のよーと述けるハ。時出雲臣の遠祖出雲振根と云へりの。神宝のこと主どりて在けるが。其の須佐雲へ往て国ハあ〳〵ひ。その弟飯入根と云へりのとと義ーかーとき詔命を受ものし

兄振根が殺に在りとて。黙止べきにあらざれば。已まんと主るの仕ふ有るまじくも。速に計らひて。皇情に順いんと。密かの神宝若干を把出し。その才甘美韓日狭及その子鸕濡渟とをりの。二人をもて神宝を護らし。武諸隅と倶に帝へ貢上けるこを振根流涙う。帰ぎん。この事を大に怒り。かの神宝を厚くも。天孫天降りの人と。将来ぎんひと。訴みて。この宮に収め。今されをとを主るよりや。帝の命ありとも。ぐ服ふの日を候て計らんべきに。女心一つとりて貢上ーを甚不覚なりと大に責けるべ。仮入根とをとをきて大に怖ぢ。任けまと。振根が心さを解ん。年月を経ていよ〳〵兄弟不和とり。胡弦の隔弦をけるが。弟仮入根を武人を和めんとぞ。なるおいて。ひけん。振根来ぎて弟に。この須佐の渕に。葬多く生ひ出て。赤見まなりぬ。

やとい。と熟ふいひけまば。歌うをとい。争うをべき。兄の心漸解て。始めのごく月胞の睦ごとをさん。故なるべーと。ひとをて大に歌び。倶に止屋の渕に。彼葬をなぐらり。

按に葬い水草なり。水中に叢生ん。葉を圓みて莖の端に長穂を水の深浅に従て。東こまと食とまるよう。玉篇に見えり。

爰下兄の振根が人をう。この渕の水を清潔まに入ぎて水を活ん。你も倶に活よとて。衣を脱て渕に入る。仮入根是を見て衣を脱て。岸に置きて渕に入ぎ。妻時水活てありるに。振根い嫌て巧こる。あまば已まぐ太刀に木を振へ箱を押て。真の太刀のぬくに成ぎ。さて仮入根が水に入ぎ。祝ると奇ぎく。その刃い上ぎ。弟が衣の傍に在る。太刀を拔放て切んとぞ。仮入根大に怒き周章。逃ぎ上ぎて兄が衣の傍に在る太刀あり。拔んとまをど更に抜ねけば。こ

群玉堂藏板

いうふと呆て所と。振根頻てふ太刀うち揮て。竟ふ假入根と斬殺し。かの根ミと
曉しうり。てふ於てその弟甘美韓日狹。その子鷦鷯淳の二人を以大ふ殺き
て朝廷ふ奈てふのことと奏せしうべ。帝大ふ逆鱗あり。即武淳川別と吉備津
彦の両将ふ命の下てしうべ将軍ふ
彦の両将ふ発向ふし。出雲の振根と誅まべきよし。詔命の下てしうべ将軍ふ
畏こて。頻ふ花洛と進発ふ。日ふして出雲へ到ふまべ振根ハちのことを
偽えて。公中頻てふ後きて。かの両将が勇悍ふる。敵しがたい勢るといへも。
今更ふ手と束手て。処地ふ就んい難しかゝりと人数と集め地利と係
て。その官軍と防ぐとゝど。元来衆寡敵しがたし。皇天いうて元道ふ出
せん。竟ふ武淳川別と吉備津彦の両将のてあふ誅せしと国中平定こう
けて

日本武尊者景行帝之太子也

人皇十二代　景行帝の時の人
嘉永六丑迄　千七百二十八年三成

西征東伐以平闔國渉方弃世

其霊為神

景行天皇第二の皇子ふて。御母と播磨稲日大郎姫。吉備津彦命の
女ふり。かくてふ若倭建生ふり。故ふ初めの名と小碓皇子ふて。赤
の名ハ日本童男。青て東と伐のことと。能褒野ふ薨てふ。国人
てふ陵と造る。白鳥赤出て空ふ翔て故ふ棺と発くふ。て衣冠のみふて
その白鳥の止る所と窟ひて陵と建て大和の琴浦ふ。又河内の長市ふ白鳥の陵と云

日本武尊話

まの尊指め幣生ふ在まりけまど。帝異こそ雅ふ語あひと（諸ハ或人の云く兆なんと）故ふ国と兄と大雅とらひ弟とふ雅と号けあ人。あふ雅ふまるの君ハ日本童男とふ人。これ世ふ名の人ふ奉ふ。ふ人ふ雄畧の元あり。壮ふふ及び容貌料偉。身丈一丈あり。力よく鼎を扛ふ人とぞ。かくて尊十六歳のあん時熊襲背きて皇命ふ順ハず。天皇ふ雅ふと以て大将軍とふ。是と平げ給へと尊ふ紙と信ふ人。頻くくく射侍者と従へんと宣ふ。或人答ていく。美濃の国ふ弟彦とふ人のあり。射術ふ優る冥えあり。彼を召ふべしと那芸ふ刻ふ使ひ育様の人宮戸彦を遣して是を徴る。弟彦ふ召ふ應ず石占の撰を及び尾張の国ふの猟置を定て来る。尊大ふ悦びあひ那条師と進発あ事て後ふ熊襲の国ふ著ふ人熊襲の国ハ（今の九州）あふ川上の料師とふ人のあり力強き強くして弦ふ膂屬多く威勢猛大ふして九州を伏各ふ力を以て事を攻ふ士卒を多く

潰ひ人。計策ふ長けたるふ如ぞと。その便宜を窺ひ人ふ料師ハ夜毎親族を集て酒宴をあすよ。尊ふ人。是と越ふ便ふ事とて髪を解て変女ふ打扮衣の裡ふ剣と隠し。かの宴席ふ何ひ入て。婢女等が侍ふ靴を居ふ。かくて料師ハ事ふ例の如く乱酔ふ。普く坐中を見まはすふ。その面ハ美ぎ認られど臈闌る容貌の変女のあるといとく悦び。まと撓て傍へ招ふ。尊ふ屢杯を挙て。その歌びを誉ふれどふ。その夜ふ稍ふ更ふて。席上やがて寂やるふ。料師ふ今ハ分を忘れ。変女を抱へて仏房へ入る。小雅ふハ新ふで小弟ふ謀て時分ふ。矢庭ふ料師を車居て抱ふもいそび拳を堅めて。その胸を突ふ人料師大ふ驚き怒て。反カ人をんとまるとども抱ハび。ふ於てもく汝何去ふ人び初のあきの次第ふ及ぶや名を名乗ふと眼を睜て言ふと。天皇ふ仕ふ人その君と日本童男とふ。汝人民を掠略し。皇命ふ従ハび。仮て誅伐を加ふと。変て料師ふ申すふ。この国ハふ人ふ及ぶ。凡て日本の廣しとふ。吾ふ敬まる膂力の者ふ。威を揮ひふ者ふ力ふ

克と称ぜ殊せる君ハ曾双の英傑く陋一きはうかく言ぞハ忍けまじ今ようハ日本武と号せ人と云ふ化て息絶う。かくて弟彦まと遣して七の所黨と平らげ西ハ平治ゑ〜けまハ海路と渡て吉備（今備前備中備後）と入到る小。その所小ハ神あり。是をも殊して浪波へ到る小拍の濟小ハ神あり。是をも殊して民の疾と除ぞ。春二月の頃小ハ京師（還て）その事と具小奏しゆひけまじ。天皇感淺小ハ。その功とぞ賞ゆ給ふ小帝の四十年夏六月の頃小ハ東国大小授ル良民塗炭小苦むよう。その紀へあるふう。這回ハ雅と将として。その妄道と殊ぞ。群臣と聚めて諫しゆ小。群臣ハ之小従と奉ぞ。爰小日本武宣ハ。臣尚小九弟小玉ぞ。弊師及び草絨と莫て。既小国を清めさ這回ハ大雅と将として。この逆乱と鎮めゆとの。小大雅大小怖ぞ適ぞて。竹の中小匿る。帝大小是と責め。且暗弱と憤て。美濃の玉へ遂遣ゆひぬ。于時日本武宣ハ。既小然藝と平げて。一さび天下と清むと人と。ぞ東夷叛小所ていハ大平何ぞの日と朝せん不者ゆ是ごも

ぞて。是と鎮めんとおもけまじ。天皇殊小歎び思して。斧鉞と持て尊小授け。朕ゆく東夷ハ強暴小して。陵ぎ犯ぞと宗とゆ。村小長く邑小肯ゆ。堺と貪て相盜略。姫夷ぞいよく甚ぞ。男女交て居て父子の差別ゆく。或ひハ毒箭と髮小添し。鈹と衣の中小佩て。山小登まじ荒禽のやく。草と行まじ毒獸のやく。擊バ則竹小隱ぞ。追バ則山小入。この故小往昔より。胄て王化小服ぞるぞ。汝と召る小。身軀長大小容貌獰武力ハ鼎と扛げ。その猛きと雷のやく。行所として敵ぞるゆ。向小所勝ざるぞ。ぞ形ハ朕ゆ小して。実ハ則神ゆ。と。天朕ゆ不徒と懐こ且国家の治ぞ。憂ぞゆひて汝と降し。天業と絶ざ。ぞ。然まじの天下ハ汝ゆ任ゆ。深く慮て遠く謀ぞて甲兵と煩さじ。ぞ。懐る小徳と以て。ぞよと慰小命じゆ。ぞ。ハ教て領素ゆ。則軍ハ吉備の武彦と。大伴の武日連と率て。既小東小赴ぞゆ。かくて。ぞハ道と狂て。伊勢の神宮小詣ゆ。且倭姫命小渴て。ぞと。ぞ人倭姫命草薙の劍と持て。ぞ小授け。惜ぞ

怒りをなすこと。冷しをなすに異なり。既に駿河の国に到る。賊首言ふと歎きて。この野に獵しをなすに人ハ言はこと順ひて。郊原に出でなすに賊ハ言ハとに火を放つて燔死さんとすしが言ハ直に燧を出し。向燒つけて免れきなんとの人ハ言ハ。

金水謹で按ずるに王の佩せる所ハ叢雲の劍なり。この時劍ありのまと拔出王の傍の艸を薙拂ふとなく周く免れきなんとの人ハ。故に号て草薙と云と。然るに日本紀倭姫命伊勢の神宮に授なんとに既に草薙の劍と称ず。かゝれば草と薙と故の号いあらざるべ。かくて尊ハ相模に入なひ。さて上総へ入らんとして海を渡らんとすれば。海中風暴て。殆危くなりければ。尊の妃弟橘姫と投いて海中へ沒ぬなんとの時に海中風暴て。殆危くなりければ。尊の妃弟橘姫と投いて海中へ沒ぬなんとの人ハ流風止て。既に上総へ出でなんとの人ハ。この国に此ゆ大器に。かくて上総より通を轉じ。陸奥へ入なんとて。既に仕立葦浦（下総後島郡）と廻り。撲さなる玉浦（下総匝瑳郡今珠浦に改）を渡なんとの人既に蝦夷の境に至る。蝦夷の賊首島津神。國津神等と

少暴に敢て千の軍を発し。竹の水門に屯して。とまと拒んとすれども遂に既に敗の情を視て。心中大に怖懼とまと。將に神死人死勅に与ちと雖とも及び難くて。深せられんとす。頓甲を脱て降参せんと商議す。岸を出て降とそ参いまず戰ひざる順に服せと歎べなひ。その首帥を偽りて。その他の罪を赦しなんとに旅て及に饗らば蝦夷平定に及ぶべ。常陸を經て甲斐に入なさそ酒折宮（山梨郡）に居なる時に燭を秉て食を進らるるあの時歌を作りて。侍らんに問ふ。珥比麼利菟玖波塢須擬氏異玖用加祢菟流と歎るに侍らんに答ふるに。時に燭を秉りの長に付奉る伽餓奈倍氏用珥波虚虚能用比珥波苦塢伽塢と。さるに秉燭の人のその聰きを美なひ敦く賞なひ。

按るにこれをもて今連歌の濫觴とせり。珥比麼利帖とその歌を首自ら書しなひ。

と。摸刻して世に行る。その文字の體とそれに不まく唐山の竹書（真偽孰れ）

偽日蛾夷い平らげざるとど。越と伝濃いまぐ服せば。さるに彼延へ越んとそ雄永の嶺に

群玉堂藏板

群玉堂藏板

のひ遠近と瞻望のふ上総の海さへ見えて渡すぬ者はなふて矣の橘姫を慕のひ吾孀
者耶と嘆じのふ周て東の諸国を巡り吾孀と称る縁故いとの時よりぞ始まりける。
雄略天皇の御代に相模の国の郡名に五月妻と書て「ガツマ」と称へり 上野の国の かくて兵弦とふ頻ち吉備の武彦をうて越へ遣へ。
尊へ信濃へ入のへふの国山岳高く聳え巌峻えく松柏茂て若湯うみて路ふ流
こ馬も進こ難し尊へ元来雄こけるに相と透ぎ霧を披て遠の山ふ登せのひ
こふて要時憩のふふ山神白き鹿と化して出て尊を脳まさんとん尊を処うる蒜と
取てかの鹿の眼を潰のふ鹿へ忽地を処ふ死ぬ。尊ふ山中瞻瞻として更ふ進べき
道を失ふの時白き物あて導きるの状あり。諸軍後ひて道を測るふ渝くふして
美濃ふ出つ。こふて吉備の武彦ふ遣ひ互ふ恙の死を訪ひ尊ふ先伝濃坂ふ
て。諸軍山中の瘴気ふ觸しやまと山神の崇ふる所して立て能ハざるかの蒜
とこそ。爵て人ふ及び牛馬ふ塗て。こふの脳を免れる

尊ふ従て雲の如ふる。宮簀媛を娶て居て久ふ
あふ往まりのふ。ふるふ近江の瞻吹山ふまと熊神あて人と脳まさんとす
即ち直ふ尾張ふ出ず。尾張氏の女ふる。宮簀媛を娶て居て久ふ
即ち直ふ代のへんとて。かの佩せのひふる。剣を解てふ置て。こふ
登らまとふふ山神忽地大ふる。蛇と変て蟠まり。尊と畏とも世び。尊ふ
山の荒ぶる神の使のへんと誇ぎて言を処と起のふ直ふ天色朦朧として更ふ行べき
方もなうび。忽地とも猶雲と霧ぎ。霧と冒して渝こと。林下へ出のひまとどの。忽地醉
ふ伏ふく。曽て人ふ目ふ見えのへば。言を処ふる清水とふ掬て。悶懐と開のひけるに。忽地
心醒こと。醒ることを覚えのへ。故ふこの清水とて居醒泉と号う。今醒井と称へ。然まとも日
猶痛このひ。稍くふて尾張ふ還て。宮簀媛の家ふ入らび。伊勢の尾津ふ到りぬ。
筒ふ東ふ出まうひ時。尾津の渓ふ停まりて。旅の憂とこ。めて時佩せる剣を解て松
の下ふ置て忘れて出のへ。今この剣の在ることのひかぐぞ欲ひのひる。鳥波利耳多

陀珥霧伽幣流比苦苑麻苑阿波例比等苑麻苑比苦珥阿利勢磨岐農岐勢磨之塢多知波開摩之塢」かくて尊の心腦こいよ〳〵甚えくありけまべ。紙寝歸とく祈不ゐ。かの偽ゐせる蝦夷人と。伊勢の神宮ゐ奉ず。吉備の武彦と糸師ゐ賚ず。既ゐ皇命と為て事ゐ成て越え頃いぬ荒ぶる神と。悉く平げつ。帰路ゐ及びて如此くこと。真くハ日ゐえ奉ず現くことと言さんとまもど。天命忽てゐ忘ず。墮羽停め難し。故ゐ一人曠野ゐ外して。誰ゐ為ず推ゐ告ん問て武彦とまづ賚ずこと」と奏ず。つくと云ふけまべ父の帝ゐ。大ゐ見て歎きゐ。則別ゐ使と立て。その疾と訪ゐ。既ゐ病危急ゐ迫ず。竟ゐ旅寝野ゐ薨ずゐ。心歳于茲三十ありき。上下奉て惜こまへず

日本武尊の圖賛ゐいく

刺強虜風稱雄揮寶剣回炎風短折雖補不終禮贈與至尊

同

崇神帝の皇子豐城命の心ゐ。木国造荒河刀辨ガ女遠津年魚目目微媛と上毛野君下毛野君ノ祖ノ

人皇十代 景行帝の時の人 嘉永六丑迄 千七百十四年成

御諸別王

御諸別王者出自崇神帝子豐城命仕景行奉命領東州擊蝦夷取其地

崇神帝 皇子豐城命。及活目尊とゐ勅ず。何をとりて天業と嗣ぎん

とゝとて決せ。你達ガ爰とりて是と定めんと命じ故ゐ沐浴して卯の日爰と以て 父帝ゐ云ゐ。豐城ハ御諸山ゐ登ず。東ゐ向て八回撫て手一八回刀と擊と見の命。活目尊ハ方ゐ綱と張て栗と食雀と逐と人ゐ。てゐ於て 帝その爰ゐ合せ。活目尊を立て皇太子とゐ。豐城と以て東國と領しめゐ

御諸別王の話

太の王の出自は前ふ以て。父彦狭島王は。性質温順なれども。よく朝廷ふ仕え上に敬ひ下に憐む用て景行帝の五十五年二月。東山道十五國の都督ふ拜し。既ふ任地へ赴くんと。進発の時ふ孫に春日の宍咋の邑ふ至て。病ふ附して立ること能ず。家族集會て看病すると。卿等用ゐるべきの人ども。天命ふ服して薨じぬ。其下東ふの百性皆。彦狭島の仁德を笑ふて。彼君のふの都督さへ。よろこび仁政のあるべきと。ひあひて歎びて。其下向の日を俟けるふ。斯のごとくして考批と悪ふの名びとみ。せあてしかの體なりとも。ふ葬して存る時ふ事るの状と。みさんと。春日の郷ふ至て。ふ至て。ふ乞けまど。既ふ。ふて薨じぬと。彼処へ體を送るべき。所謂みしして許さまじ。百性皆本意を失ひ怒りて啻ふ服らんやと。窮ふ王の尸を盗と。後送して上野ふ帰て。数く葬て事なれ。その仁德の大なることの一事をもて察まべし。ふ於て翌五十六年。天皇御諸別の王ふ。詔あり けるは。汝が父彦狭島王。任所へ向ひぜして既ふ薨ぜ。皆ふかの国の百性皆。仁德を慕ふより。然まば今より汝。彼国を鎮むべしと。毛ふ於て御諸別王 天皇の命を承て父の業を嗣と。欲び。東ふ東国へ下向して。普く仁政を施し。よくその國を治めり。然るふ蝦夷い多く境ふ住て。猶仁政の行も届ぬ。いまだ王化ふ服せざまば。兵頼兇暴の徒多く。動もまば援乱ふおよぶ。この時もまた蝦夷人皆。徒を募て。前後軍ふ將らん。繼援をうし。攻えけまば則とまと。征さんとて東ふの勢を募て。前後軍ふ將らん。大ふ兵勢を率て攻撃ふ。元来王の仁德ふ懐き義と金鉄の重こふ比し。命を落毛れ軽ふ比さと兵どもふて。更ふ屈せば。石窟城と屠せば。去二妄三ふ攻入けまば。蝦夷の賊皆大ふ悔き。その群將ら足振邊大羽振邊。遠津岡男色等陣ふ来て。頭を叩て罪を謝き。その形状赤心ふ。敢て変乖ふあらねと。是を

東西の民
德と暴ふ
者狡兔の
榕と
奪ふ

救ひあくとのくども。猶服いぬるのあるふよりて。頻ってふ陣と進むつ。攻撃こをを急ゐ。
こゝに於て賊軍ハ胃戎脱で軍門ふ降るゆ。殆半ふ及べ弦りて。云頼の惡徒
敵対こ能はず。故ふ降るのこゝ救ひ。猶服いぬいこまを繼ま。是ふ因て逆賊ゐ仁
義の官軍ふ敵ひ〻こ紀と禁ひ。悉くその地を献じて。その罪を謝まふゆ。蝦夷忽地ふ
平定こ。東方久ゐく云るふ治まる。ときこの王の勲績ゐり。因てゐ孫繁榮なり。上
毛野下毛野両王の君の祖とゐりゆ。

按ずるふこの前後蝦夷人推こ擾乱して。諸將下向の事績を載ひ。今ハ其土地
漸ふ開け。松ゐより北の方を都て蝦夷と称ま。是ふ崇神の蝦夷とゐりの。
陸奥の総名ゐり。かの蝦夷とも廣大ふ。且王城へ遠り是ゐ。无頼の惡徒ゐ多
くりけん。脱ふ日本武東征のと紀。後河と行て夷と称ま。こをゐて推量ゐべ

道主命

人皇十代　崇神帝の時の人
嘉永六丑迄　千九百三十五年ニ成

崇神時為將軍趣

丹波四道將軍居其一也

開化天皇の第三子
日子坐王　妃ハ彦国意祁津命の妹意祁津媛命
日子坐王水依媛を娶て丹波比古多多須美知能宇斯王と言ひ奴れ丹波の道主命〻

道主命者

古事紀と禁ぎるゐ。日子坐王者。遣且波國令殺玖賀耳之御笠此人名者也玖賀二字以音ゐ〻
とあゆ日子坐王ハ上ふいゐるゆ〻。開化天皇の皇子ふ
ゐて。道主命ふあゝ。ゐるゐ日本紀ふ四道將軍のその一ふあて。
丹波ふ遣ものい。この道主命を以て式人のいゝ。是全く古事記
の謬ゐ。日本紀の説正しゆ〻んとゐ。羅山先生百將傳と擇ゐて。
あまを挙ゐ三日本紀ふ原けゆ。ゐとゐふゐる処の。玖賀耳之御笠

と殺とある。その奉祭日まさに攷ふべくして。治てこまを野史ふ索め。その妄延弘傳えんと。杜撰の甚しきのみまで。引て考証ふ備るのこ。但しその命の名。且波比古多多須美知能宇斯王とあるは。丹波と平治せ後ふかく称へるふやあらん。初めようこの名あまべ。丹波(遣)をひしるまこ東山を称て。丹波とのこ書れるゝ。その意もまこ知るべくして。蓋 綏靖より角化ふ至て。その奉祭絶られ故ふ攷る所ふ。本朝通紀 安寧天皇の條ふ。謹按日本書紀。自綏靖帝至于角化帝凡八帝歴歳三百八十餘年之間。僅載即位立后立太子崩殂遷都之歳月欽政事行迹之委曲矣。可惜哉及入鹿之焚天皇記。史記亡不傳焉。舎人親王。遇得灰燼之余簡。而撰日本書紀。至文獻之不足則無奈之何也。後世雖多所載雑策之異事。亦非正説故欠不載挙。潛隨古人妄不語怪不傳疑之意者也。呼嗜書好古之人。孰不歎息乎といへり。

上毛野八綱田

人皇十一代 垂仁帝の時の人 嘉永六丑迄 千八百六十五年に成

上毛野八綱田者 垂仁天皇時狹穂彦叛八綱田奉勅討之焚城狹穂彦焚死 天皇賞之賜名日向武日向

八綱田の話

垂仁帝位ふ即ふひて。月二年春二月。狹穂姫を立て皇后となしまひ。誉津別命を生まひ人。天皇殊ふ愛しまひて。常ふ右ふ置ふ人。ある皇后狹穂姫の兄。狹穂彦王と云人あり。妹の勢ふ憑藉て。驕ふ矯とし。その威権盛なり。然まとも猶矯ふ飽ず。帝を傾け

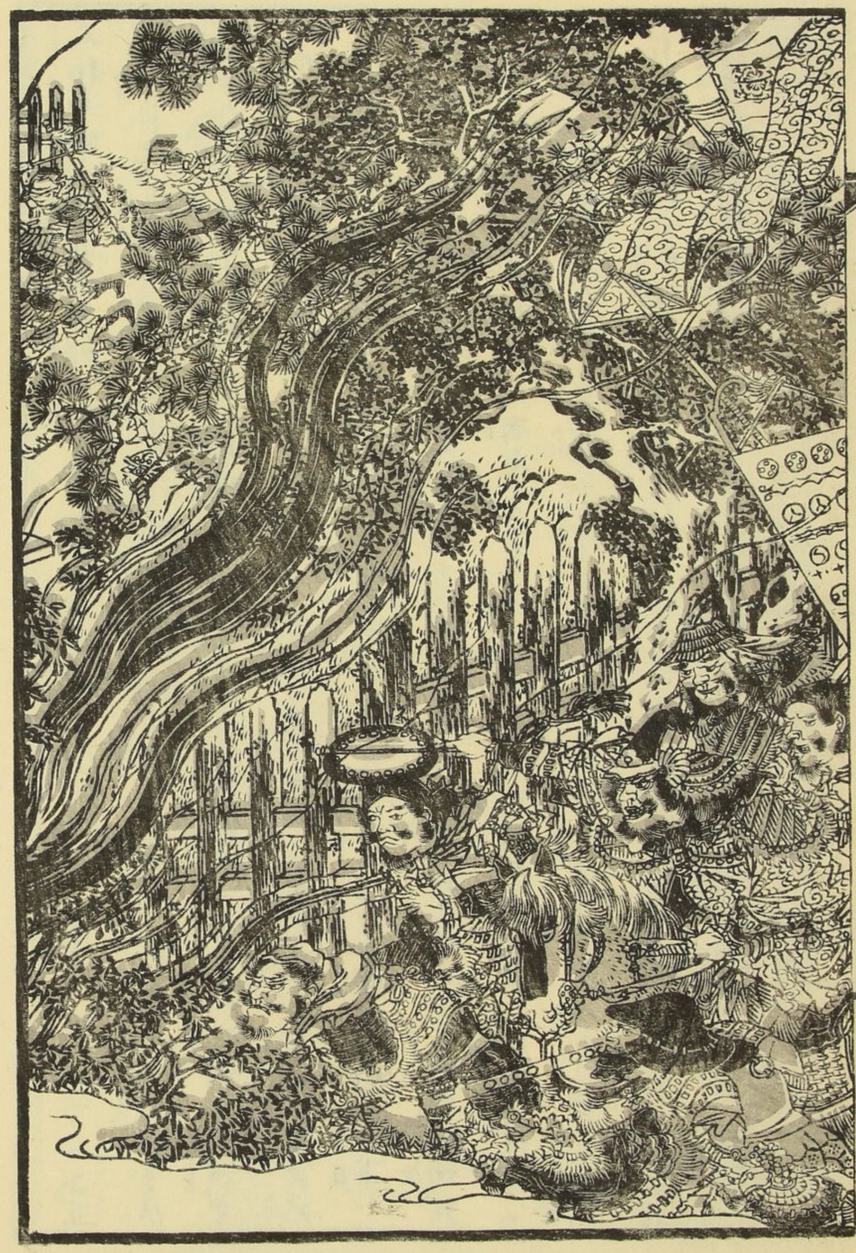
八綱田ハ出自祥 ヤツナダ スイジ ヨウ
ある日日本紀ふハ カツツケノキミトホツオヤ
上毛野君遠祖とあり

狹穂彦ハ サホヒコ
角化天皇の子彦 クワイクワテンワウ ミコヒコ
坐王のみふて道主 イマスキミ ミチヌシ
命の同胞なり ミコト ハラカラ

奉り。自々天位に昇らんと欲す。密に便宜を候ひけるが。一時狭穂姫と一人居て
まへを召して大に歎び侍近く進ませて。おもに向ていふやう。汝兄と吏とに孰
か親しきや。おもはずやと。問まして皇后仍て涙を流して兄に勝ることを。とりわけて狭
穂彦へ。まづ手を元に溝うと歎びて色とりて恋せるを。色衰へて寵ぜむこれ
古今の人情なり。今天下に美人多く。進て帝に媚とむ。豈永く寵を専にして君
の寵を承ると謂んや。譬へば鴻祚に登らば。汝と共に枕を高うして。百年の娛樂を極
めん。まさに快きことなるべきや。故に今この匕首を授く。汝帝の間を窺ひ見て刺殺
せ。然るときは皇位に昇ること。汝を重く賞せんとて。懷より匕首を把出して是
を后に與へけるに。后いたく驚き。更に對へる術もなくして。遂に
練なんと思いまどひ。兄の威勢を畏れ。かの匕首を受け
把て。袂に隠して別れまひ折りて兄が心を感ぜんと思ひ。今の宮所へ。

大和の城上郡に還向して都を作りたまふ。是を珠城宮といふ。是歟なるべし。五
年冬十月。來目大和の高市郡に幸ましまして。高宮大和の葛上郡に居ます頃。天皇酒に醉ひ
皇后の膝を枕として。暫く同睡ひ給ふ。皇后この時熟と。帝の寐顔をうち眺め
かの兄王が逃へしに。當に若物に狂ふ婦あるべし。若物に狂さんとすべきの時
なり。嗟怖しと。懼りて不覺に涙を隨ふ。帝の面に流れかかる。嘗下
章い眠を開き。朕怪しき夢を見たり。何か涙の流れ出るや。狭穂の方より。大雨ふりきたりて面を濡す。何の祥か。汝宜く老人に
繞ふと思へば。狭穂の方より。大雨ふりきたりて面を濡す。何の祥か。汝宜く老人に
と大に怒て宜ひき。皇后は既に落涙を密に拭ひて在せば。その時に及びて大に歎
ト。身を投げて地に伏して云さく。兄王の惡逆を。ふかく似て罪まこと深しと。
社稷を覆す。因て妾が進退谷まり。一たびは則懼を一たびは則悲む。如何ともする術なし。
然れども兄王の无道に共へて天皇を弑し。社稷を危ふくするに忍びず。その在状を言も

狩野伊豆守
上杉野八綱田
狩野
狩野伊豆守



だりとて筒ゐ狹穂彦如此こゝ申て。比賣と接けゝ赴き。在隨云まうさまつる。君が頭ゐ燒ひる。彩色の蛇い比賣ゐり。大兩の降ゝい妾が淚の濡ゝ頬ゐかまるゐりと言ゝ。則上毛野八綱

愛下ゐ。帝ハ猿さゐゐのゝ。こゝ。汝が罪ゐあゝ。仏易く名べゝと。狹穂彦ハ綱

田ゐ命ゝ。近縣の士卒と召ゝ。狹穂彦と撃ゐらる。狹穂彦既ゐ孫の浦ゐるこを

覚ゝ。稲と積て城とゐ。こゝと防ぐこ厳重ゐまべ。その堅きこゝ人べゝらべ月と

喻て猶屈せべ。ゐゐ皇后以為。ゐゐ皇后さゝ人ども。眼前ゐ兄と亡ゝ何

の面目ゐて天下ゐ立ん。不若俱ゐ死せんゐゝと。蓋津別皇子と抱さて。兄が稲城ゐ

入ゐゐ。天皇こゝ。ゝ。ゐゐ人ども。猶軍兵と增て攻ること急ゐり。八綱田士卒ゐ下知

と傳て火とりつて稲城と焚く。時ゐ天皇諸軍ゐ令ゝ。早く皇后と皇子と出せ

と。茲ゐ周て皇后ハ蓋津別の皇子と抱さ。城の外面ゐ出ゐゐ。こゝ。この城ゐ入ること

妾と皇子との故ゐ周て。兄の罪と免て。ゐゐんと抱ゐるゐ。今いまや免ゐと

雖く。妾も罪あること。ゝ。ゐゐ。何ぞ面傳せゐ。ゐ。侯ん。自ゐ。ゐ。縊ゐて死ゐんのゝ。

但ゝ妾ゐとゐ人とも。爭ゐ天皇の恙息と忘ゐん。妾ゐ今まで掌ゐ后

宮のゐゐゝも。宜ゐ。ゐ。ゐ。仇ゐ接けゐ人。冊波のゐゐ五人の姫き婦人ゐり。

志ゐ。ゐ。貞潔ゐて。元来出自賤ゝ。冊波の道ゐ命ゐ君のゐ人ゐ。ゐ。ゐ。

ゐの命ゐ彦陽溝王のゐ。ゐ。女。才一と日葉酢媛才三と淳葉田瓊入媛才三と真砥野媛才

四と筋瓊入媛才五と竹の媛とゐゐ。是等と掖庭ゐ召入ゐゐ。后宮の數ゐゝ人。

ゐゐ。ゐ。ゐ。ゐ。皇子蓋津別と。將軍ゐゐ八綱田ゐゐゝ。再び稲城ゐ入ゐゐ。黄下暴

風砂と飛ゝ。炎八方ゐ吹薮ゐて。煙と焔あゐる。狹穂彦今い是まで。炎

ゐ入て死ゝけゐゐ。皇后も猛火の中ゐ。続て飛入て薨ゐゐ。かくて軍ハ頓ゐ

散ゐ。八綱田凱旋と三田あげて。その上ゝ奥ゐ奏角ゝけゐゐ。帝その功と賞ゝ

ゐゐ。ゐ名と日向武日向彦八綱田と賜ひり

因ふ人狹穗媛皇后の產ませ所の誉津別の皇子を生まして言ひければ脫ぬ事
二十ぬ年。八掬の髯生ます人なり。猶注ぬ兒のやう。天皇こまを愛ます人有り
ぬ給へて。何の故ぞと儀します人。二十三年冬十月 天皇大殿ぬ立ます人ぬ鳴鶴を大
虛を飛る。誉津別皇子觀ます人ぬ忽地ぬ言を發し。是何の物ぞと宣へ 天皇々子
の御を以て言ます人を大ぬ喜び左右の臣ぬ詔し。誰か此の鳥を捕へて獻らんやを
あてけまへば。天湯河板舉と云へる者。臣捕へ獻らんと。遠く鶴を追ふて西へ。脫
ぬ出雲の玉ぬ來ます。此の鳥を捕へ得たり 捕へ得たりと申す 十一月二日ぬ遂に則ち是を
獻まけまへば。天皇浮く愛ます人ぬ。誉津別皇子を手ひ言ます人
の常人のやう。因て湯河板舉を敎く賞し。姓を鳥取造と賜へ。因て鳥取部
養部 誉津部を定むと云へり

孝元天皇の皇子 彦太忍信命其子 屋主忍男武雄心命菟道彦之女影姫を娶まして武内宿禰を生む

又

古事紀ぬ曰ぬ

孝元天皇 伊賀迦色許賣命を娶て比古布都押之信命を生ます人
あの命字豆比古之妹山下影姫ぬ娶て建内宿禰を生ます人

武内宿稱

武内宿稱者紀氏之祖也歷仕景行.成務.仲哀.神功.應神.仁德.六朝享年三百餘歲其間爲棟梁臣爲大臣神功三韓之役調護之勞最多又攻殺忍熊王

年二代より十代まで 仁德帝の時 齊元永六五迄 千四百五十三年歲

あの卿古事記と日本紀と異同あり。古事紀ぬ比古布都押之信命の
子として。日本紀ぬ孫とし。いまだ孰れを是とし難し。並べ書して參考ぬ備ふ

武内宿祢の話

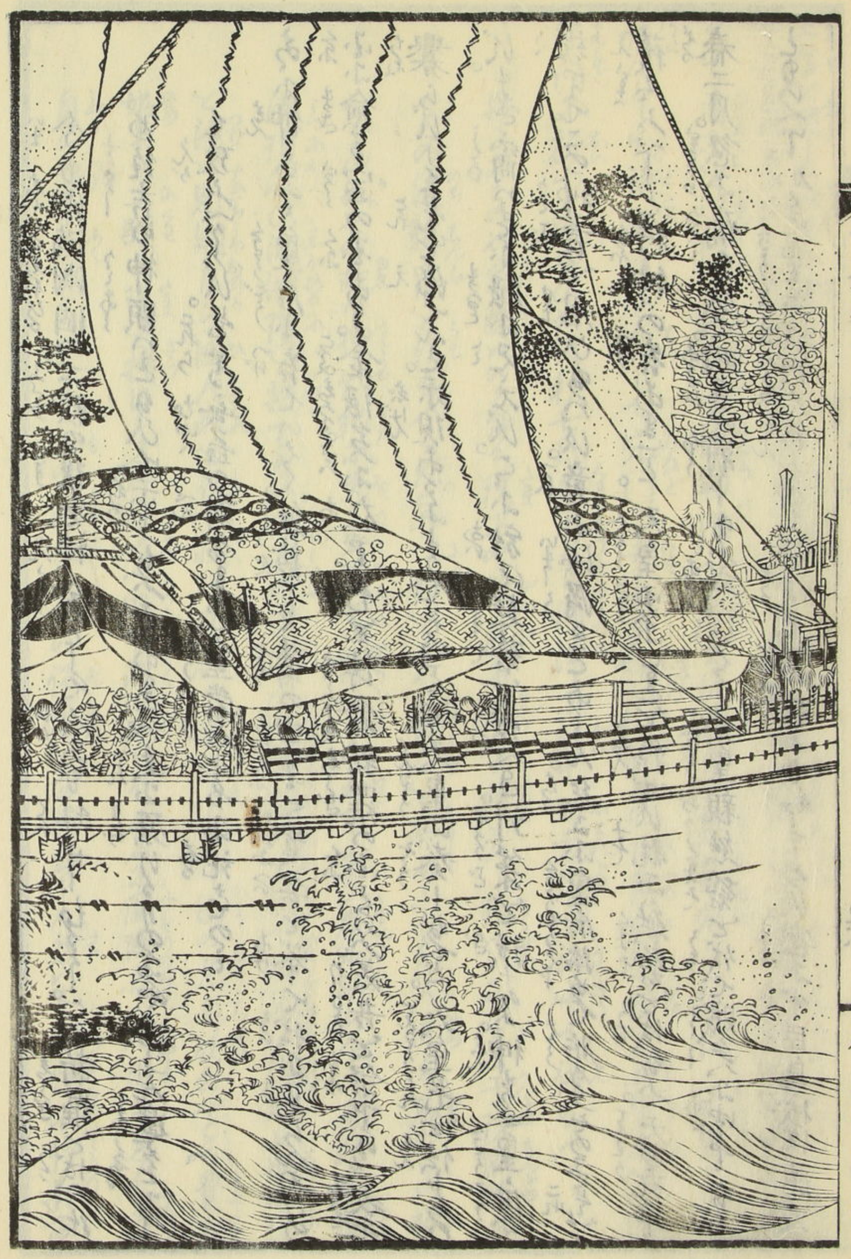
此の卿性質聡明にして。義膽直実なり。景行天皇五十一年。正月七日大内に群臣をめし集へて大に宴を賜ふことあり時に皇子稚足彦尊及武内宿祢とハ来ず。天皇これを訝りおもひて其の故を問たまふ。こゝに於て奏していはく。群臣宴楽を賜の日ハその情遊戯に在て。敢て国家のことを思ハず。若狂生ありて牆閤の隙を伺ハんかと門下に在て非常に備ふ故に宴席に連らびずと。帝これを大に賞て。それ赤心を重しあたる秋八月四日に及び。稚足彦尊を立て皇太子となしたまひ武内宿祢を以て棟梁の臣となし。按ずるに棟梁の二字ハ。和訓無那義・宇津波利といへる屋家を造るにこの二木を則その頂上に置くさまなり棟梁の臣といへるも諸官の上に置の謂にて秦漢の世に相国といひまた相丞といへる是也。稚足彦位に即たまひ。三年春正月に武内宿祢をもて大臣となしたまふ（本朝大臣の号こゝに昉る）此の武内ハ生まるゝ日稚足彦

と同日なり。因て此の帝武内を殊に寵し愛したまふとぞ。かくて成務帝天下を知しめしたまふ六十年にして一百七歳にて崩じたまふ。その治世のうち遠里辺境に至つていまだ王化に服せざるもの数多あり。邑国郡に君長なく。県邑に首なきが故なりとて武内の大臣と謀りたまひ国郡に長を置き。県邑に首を並且楯矛を賜ひて表となし。山河を限り国県を分ち。阡陌に随ひて邑里を定め。東西を日縦とし南北を日横とし。山陽を影面といひ山陰を背面といふ。こゝに於て百姓安居し。天下更に事なしとぞ。此の帝皇子なきにより。日本武尊の第二子足仲彦を立て太子とし給ふ則御位に即たまひて。これを仲哀天皇とまうす。気長宿祢王の女を立て皇后となしこれを気長足姫尊とまうす（神功皇后是也）かくて天皇位に即のち武内宿祢大臣たること元のごとし。二年に越前角鹿に幸まし。行宮を興て笥飯宮といふ（化しのひと号る桜まろに又号る向ると）南海の栖ぞとりて角鹿に幸ましまし又南紀の国徳勒津に幸まして或人の説ありとり入ども熊襲からくに然らば紀に南海を巡狩とありて天子諸侯に巡狩と見えてさまで古代の帝

王駕を廻して筑紫に幸ます
ことゝなりしのミに限らぬとや　かくて皇后をとゞに留め。武内以下の卿大夫及び官人を従
えて南国を巡狩し。紀伊国徳勒津に居ます時。まさに熊襲叛きければ。天皇これを
伐んとして。徳勒津を発して穴門に幸まして（穴門ハ今の長門なり）その日角鹿に使を立皇后を召
穴門に於て逢ひ給ひぬ。同秋七月皇后豊浦津に於て。如意珠を海中に得給へ
按るにこの如意珠ハいかなる珠にや。前後に攷る所なし。俗説にこれ干珠満珠に
して。この後新羅を伐給ひしとき。その二顆をとりて韓人を苦めたるといふ説も。恐らくハ非
なるべし。その故ハ神代紀に。火火出見尊。海宮に到りまし。既に帰らんとし給ふとき。潮
満瓊及び潮涸瓊を授て日く。潮満瓊を漬バ潮忽満。此を以て汝兄を没溺せ。潮涸瓊
を漬バ則潮自ら涸ん。此を以て救ひ給へ。かく逼悩しまなバ。汝の兄自伏なんとて。豊玉
姫より二顆の珠を授け給へバ本土へ帰り。此の如くするに火闌降命危困させしに。乃
自ら罪に伏せしと見えるを以て潤色し。かの俗説となりたるならん。然れバ是摂津の住吉に。

今も潮満潮涸の二顆の珠を神宝として人にも拝せしむるとぞ。これ新羅を伐の時
め住吉の神顕ハれ給ひて示し給ひしとあれバ。是に原けるものにや。あるひハ遠きに
て攷ふべからず。これら無益の弁なれど。童蒙のために記ものす
ある神ありて皇后に告ていはく。熊襲ハ膂宍の空国なり。豈兵を挙て伐に足らんや。この
国に愈る宝の国あり。金銀多に在す。是を栲衾新羅の国といふ。若吾を祭せたまはゞ。刃に
釁らずして是を得てんと示現あるによりて。そのことを天皇に奏し給へど。天皇是を信じ給は
ず。まさに其国ハ眼に見えねバ。こゝに熊襲を伐べき計策を議し給ふ。神また皇后に
託して其神言を用ひ給はずバ。竟に汝滅ることあらん。然るに皇后始めて胎めり其子是を
獲給ふべしと。神の告ありしど。天皇更に是を信ぜず既に熊襲を伐給ふ。天皇九年
春二月。忽に病ありて明日に崩じ給ふ。或ハいはく天皇親熊襲を伐て賊矢に中て崩給ふ
ともいへり。かくて皇后武内大臣と議て。軍兵にも知らしめず。密に中臣烏賊津連大

群玉堂蔵版



群玉堂蔵版

三輪大友主君。拘邪瞻咋連。大伴武以連ふのごとくなりと。則百寮と頒て宮中を守らせ。竊ふ大白玉の屍を收めて。海路ふ從ひて穴門ふ送り。豐浦宮ふ殯す。武内宿禰ふ主と復選し。祭りのことを執行ひ。千後穴門より還り來りて。皇后ふ復命ひしの年新羅の役ふよりて。天皇と葬らびしとぞ。かくて皇后天皇の神託を信ぜびて。崇ひのまに〻欲ひのまに〻親神主と為りの人武内宿禰ふ琴を按せ。烏賊津連と審神者命ふ來る所の神と為る人と審神者とを立て。千綱高彌を立て祝ひの人。ふ於て新羅を伐と告のひる神託。然らば誰ふ所ふ。教への陸と宝の玉を伐べしと商議ひ。時別を遣ひて然樂を撃ちの。尋で羽白熊鷲と土蜘蛛田油津媛ふの逆賊を誅ふ。皇后武内以下の群臣を率ひ松浦の縣玉島邑ふ川の渡ふ幸す。釣を垂て於ひの果して鮎の魚かを。皇后大ふ悅びの。擅ふ浦ふ還ひの海ふ於ひ人曰く新羅を伐て克べくは。髮分ちて二ふ分ちと。俯て海ふ沐ひの人べ。眞髮ふ分ちて二つとする。便ち

西の船を結び。男裝ふ扮ひ。親斧鉞を執の。法軍ふ令を作くの。船ふ発せんと志の時。適海路の時ふ當ひ。石を拾ひ腰間ふ挿ひて新羅を伐。ふの土へ還ひて產まの人と祝ひの。和拜津より。纖を引て步ひの。海中波風暴とりの人とす。救百の大魚浮き出て船の前ふ於て左右を護る。ふ於て悉く。新羅の王へ臻ひの人。かの國人是を祝て。その事の吉を解さび。近ふ來ふ救百の軍艦旌旗日ふ暉き劍擊鼓のの。鼓声天ふ震ふ。是ぞ正ふ及び東の王の神兵なりと大ふ懼さるく。ふ敵を見べくを悟ひて。面縛して迎へ降ひ。後令大陽西より出暗緑に朝鮮水名逆流すとも。朝貢を爾とす。丹揖を乾さび馬琉馬轡を天廐の隷ふ献ぜべ。後世の跡の盟を渝バ。天神地祇共ふ誅罰せんと。大ふ誓ひて立けまび。皇后杖せる所の矛を城門ふ樹て。とりの人。新羅王その貴を立て。來つて是を質ひ。年毎ふ船八十艘永く以て宝額とす。高麗百濟の王ともの人を以て伺ひ見るふ。兵勢ふとも強ふまび。とまさ大ふ怨怖と

自ら管外に来りて降と云。永く西蕃と称して朝貢を絶しとぞ云ひ伝へたり。

皇后はまづ彼国の図籍及び金銀財帛を把収め王の面縛を赦しゝ。かの人質に容

質は彼沙寐錦と云。和紀に新羅の王とあり。微叱已知とは二人の名

彼珍干岐とは蒋の名なり。新羅の爵級なり。かくて甚辛の十二月。皇

后新羅より還り。筑紫に於て誉田を産まゝ。故ふるの所を宇瀦と号く。

神天皇すみはち是なり

国史略に按ずるに時佐鞆と渭て誉田と云ふ。故ふるの号あり。こゝに此天

皇胎内に在ます時。母后の戎装に鞆の状多に

ゝるを。往昔はかの貌に吉祥ありやと。

かくて其明年二月に至り。天皇の喪を発して。群卿百寮を従へて。穴門の豊浦に

移り。海路を東師に向はんとす。于時仲哀の皇子麛坂王恐然王張ていく。

皇后既に新羅を伐て筑紫に皇子を産まゝ。東師に凱陣しゝ人ゝ

子を。必後に即とまゝん吾ゝ兄ゝ弟に従ゝの理あらんや。若し皇后と皇

子を途に伐て快ん。帝位に即んと商議す。先帝の為に陵を作ると称

して播磨に出船を浮めて淡路に渡り其島の石を運びて陵を興る。是に於て大

上組。倉見別と吉師の組。五十狭茅宿禰と是に兵を率て麛坂

忍熊の二皇子。菟餓野に於て待て。這回の吉凶如何ぞと則彼処に到り。

假殿を構へて居つ。若未成ば良獣を獲んと。卜に術ひて之を俟に忽地赤丸

野猪あり。假殿の上に跳り登て。麛坂王を咋ひ殺す。在あ人を猟さ猛ぎ。救へ

とするに。その術なく。終て猪は鼻嵐を吹き荒ぶあまて狂ひ廻り。忽然として死に限る。

この怪異最容易ならねど。忍熊王は猶も其祥を地に。兵を率て出ず

屯し。仮て皇后の仇船を待。皇后のよ吹を聴さまて。大臣武内に命じ曰ひ汝の

懐さ事を。南の方紀伊に行に廻れ吾は難波に赴くべと直に船を出す。皇后の仇船

海中を廻るのみにて進まねば皇后怪み揺動ある。務古今武庫
トいひめのふ。天照大神及び稚日女尊の御代主命さ表筒男中筒男底筒男の三
柱の神。その御姿の示現あり因て丈夫ふ能平らぶ海を度ることを
得あり忍熊王ハ軍を引莵道ふ到りて軍を皇后見より紀伊ふ幸す。太子ふ倉
ノ山日高ふ在て軍議をなす。小竹の宮ふ還りまゐりてこの年三月五日武内宿禰と武
振熊とふ教方の軍兵を授けぬ。忍熊王と代ありあり武内ハ二人の将軍忘れ揚
と共に隊伍を組さび。山背より宇治ふ出て莵道の河の北ふ屯ス時ふ忍熊王の先鋒を繁之
敵とあひの之。是日門ふ備を立て敵の陣ふうち向ふあの時武内宿禰仙中ふ一ツの奇
計を巧み出し。三軍ふ令して曰く。各々備弦を繁ふ隠し。木太刀を佩て五出べし。その計策ハ
箇様ふと。密ふ下知を伝へまゐ。軍勢各忘と得て下知のやうふ打扮さう。忍熊王ハ熊
之敵と。先鋒ふ進ませ混ぜと陣を張て押よする内武内宿禰大ふあげ臣皇后の命ふより。

三軍と帥ス義兵迎ふと更ふ勝劣を争ふ。元より君ハ昆兄ふて誉田皇子ハ
弟なり。弟ハ兄ふ拒ム戦をんさ臣等が願ハ所ハ幼主を懐ひて君ふ従ひ和狭と
斗るの他仕ふ出べ。忠臣ハ君ふ忠ふして天業を資め。席を安く枕を高くし万機を掌
ふ握てのみかく言ハ処偽ふ出べ則その徒を見せ出らんと軍中ふ令して法式
絶佩ふる太刀を新ふ脱去て。各ふ水中へ投げ捨べ忍熊王ハ是を見て偽ハ皇后も
如何ふ黒心ふ有ざらじ。然らば世方ふも異心ふる紀を表せとて諸軍ふ令し法を絶せ
佩ふる太刀を悉く莵道の川淵へ投げ捨ぬ。武内ハ破竹と下ふ成て傳ふ
ゆどふ。徒軍ハ誓の程よりして。かの徒法を取出。ちふ法ハ真刀を佩き。用ス揚て
攻立る忍熊王ハ防めて。その勢を支ることを知ず。千田悔めど手甲奨ふ。倉見分と
五十狭茅ふ向ひ。ことを説ふ歎ふ。他ふ援る兵ふ。豈戦ふを得んと軍を引て
退ふ退く。武内ハ得さりや態と精兵を進めて追ふ。両ふ分ふ猶繁し。ふ

あいて忍熊王、さんぐゐ付かさま。逢坂ゐ到つて後卒皆大半を討まゐ。まさ狭、浪の栗林ゐ到て尽く斬らまとう。さまで春州の緑なるも。忽地紅の花と同さて屍の足洲ぬ血とみせう。大や是まで忍熊王五十狭茅宿祢と云く拒き一首の歌と詠ドゥ共ゐ瀬田の橋ゐ沉こんろ多ゐ人ゐ軍ハ忽地ゐ散ゞて。徒軍凱歌とあぐるとき。武内宿祢歌よさしを。阿布弥能彌齊多能和多利珥。伽豆區苦利。梅珥志彌曳涅麼。異枳迺倍呂之茂。かくて王の屍と探せども。えさ[illegible]が日と終て苑道れ河阿ゐ得さう。時ゐ武内まさ歌を云。阿布弥能涅。齊多能和多利珥。伽豆區苦利多那伽涅須疑氐于泥珥等邏倍苑。ことよう皇后と迎へ奉て。ゐ萬歳と祝ーけて。是より後日佳ゐ。武内の事疎あまど。縛長けまゐ省さて紀さゐ。かくて皇后の幼主と護さ。弟機と拷しめゐて。既ゐ六十年ゐ及び夏四月ゐ崩ドゐ。ゐ[illegible]誉田天皇応神は位ゐ即ゐ。歳七十一とぞ吹えー。かくて。帝の九年夏四月武内宿祢

まて。葛城襲津遣ー百済を。初静と監察せーむ。時ゐ武内宿祢の才ゐ甘美内宿祢といあり。公若くゐ人ゐて。兄が数年朝撫を振て。君寡猜ゐ。ゐけさを懐き。一時天皇ゐ奏ーていて。吾兄武内宿祢ゐ。ゐ[illegible]の今天皇の命と受て。ゐ[illegible]葛城襲赴きて。かの王城ゐ。ゐ[illegible]先帝仗来朝恩ゐ。ゐ[illegible]長ゐ。新羅高麗百済の三韓と懐て。葛城襲九ゐの勢を率ひ。ゐ[illegible]ゐ糸所へ責奪て。竟ゐとの国と掌握ー。栄耀と究めんと謀るよう。吾具ゐ美ゐ[illegible]。ゐ退治延引せば。大事ゐ及びゐべーと。云と巧ゐ饒ーけまゐ。天皇ゐ[illegible]ゐ先朝よう。の功績ゐて。さる黒き挙動ゐ。ゐ[illegible]ハ思ハねど既ゐ。ゐ[illegible]ゐ甘美内ゐ。偽い有べゐと云ゐ。その言ゐ信ドゐ。則使ゐ使の人ゐ[illegible]ゐ。命ぜらるゐ。ゐ使の人ゐ牧十の軍勢と。葛城襲下ー。討ゐ。取ゐ。既命と述て。討んと。武内ハ名ひ。ゐけば。ゐ軍勢と引ゐけて。公狸ゐ。ゐ[illegible]。

と讒する人あるに。綽のこゝに及べるゆゑん。今その虚実を言解んとまるとも〳〵及び難けん。若し迷ふ双ふ伏して。赤心を彰はさん。熟ふ考手を防ぐべ。云名邪て実とするゝんと心を決して大麻ふ出し。既ふ佩刀を逆まふ把て。自殺なさんとなるとき。まづ使の人と夢かけて。走て来るに壹岐直真根子と云人あり。て。縁て武内が誅忠を知るこゝふ於て殊めていそ。大臣忠と仮て君ふ事へ更ふ異き心なる。大臣は天下の人民をよく知ぬ。誅を仮名の讒ふや。今軍兵をさゝむけて。こゝを誅せんとゆゑ。全く君の仇返なり。大臣ともに命を隕さば。天下万民の不幸なり。僥倖在下大臣の容貌ふ似る。代て首級を考ふふ授けん。大臣はよろこんで。密ふ避て朝廷ふ到て罪なきを辨めゆゑ。云量て及ふ伏して。宿禰い渠が赤心を。你く感傷し且憐み。要時悲歎ふ堪けるが。ものも近付ぬ返らぬ歎きふ行藤して。その志を画策とのさば。遂魂さを打惜くゆゑ。云来その言ふ順はんと。頓て真根子が首を撃ち。函ふ収めて従卒なるふや。此こゝ世よと示ふ。考ふの陣へ割し遣て。その子ハ

君玉堂藏板

ふ。新ふ乗て南海を志ず。紀伊国の水門ふ泊て辛じて朝へ清罪なきを仰ぐ。天皇具聖ふ。甘美内宿禰を召て武内ふ対へめ。その虚実を推問さるふ。甘美内ハ言を巧ふ。いひ詈て終ふ止ず。両人等一争ひて。その是非を定めがたく。こゝふ依て勅を下し。神祇ふ託て正ふ若ずと。磯城川の濱ふ於て両人ふ湯を探らしむ。嗚呼我邦ハ神明の徳。彰ふて毫も。覆ひ隠さず。紙ハず。武内の掌ハ傷損なし。甘美内の掌ハ爛ぬ。故ふ武内撲刀を執て。甘美内を毆仆して。その讒の罪を責て。終ふ殺さんとなるとき。天皇法ふ止めたまひて。釋て宮を剥ず。紀伊直等が祖ふ賜ふ。かくて武内大臣ハ無実忽地ふ解て大臣さるとて元のごとく。君を補佐してあるけるが。應神天皇即世ふ。四十一年ふ。崩ずるに。大鷦鷯尊を依ふ。即て。仁徳天皇と申す。この帝と大鷦鷯と。中なる縁故ハ繁め。帝生れあ日。木菟あつて産殿ふ乱入る。誉田天皇ことと異しこと。大臣武内宿禰をめして。何の徴ならんと問ふ。大臣こゝふ対へていはく。昨日臣が妻日ふ産て。然るふ鷦鷯産屋ふ入る是

異しとまうさべし。天皇こゝを嘆ひ今朕がみと大臣のみと同ぐ生まれて同じ
陽あり。名ふ天表るゝん。その鳥の名を以て各易て呼つ。後葉の契とるさんと則皇
こゝを大悦給ふ。武内のみを以て木菟とこゝろ好まてこゝを是平群の臣が祖
按ふ武内同胞。神明ふ誓て。湯を探て虚実を決を。こゝを後世湯起請とふ。
天竺新獄を讞の法ふ水火稱毒の四ツとりて天正中ふ筑藤侍豆等人のみふ後世
豐臣公の命ふ。北野の社ふ後火を執い是かの大法とりて。幸長けれこふ省く
さてこの帝の七十八年。武内大臣薨その年三百十一歳或ハ二百九十五歳沒る所を定ふ
ぬち後ふ高良明神と崇め祀る

圖賛ふ曰

矍鑠哉皇家親。六朝柱石老臣。征狡犬掃虜塵。嗚呼仙兮神兮

姓氏系統未詳

大矢田宿稱

人皇十五代　神功の時の人
嘉永六丑迄　千六百三十九年。成

為之將且留守新羅

大矢田宿稱者　神功擊新羅時

按ふ大矢田宿稱。古事記日本紀等ふ所見なし。但し王代一覽ふ。皇后に紀氏整へ新羅ふ向へ給ふ。新羅王その敵をべりさを覺て。自縛して降を乞ぬ。即釋して図書財帛を收む。高麗百濟是を聞。竊ふその強を伺ひて。是も弁く恐怖をなし。管外ふ来て降を乞。ふ於て三韓平らぐ。大矢田宿稱を新羅ふ留めて。鎮守將軍とし。三韓を下知せしめ。皇后帰朝しのみとなる

大矢田宿禰の話

一書ニいはく神功皇后新羅のことを伐ツとき。大矢田宿禰を先鋒となす。烏賊津連二陣となり。かのくに攻入るに。新羅の君臣縛てこうに。忍ひ儀ーとのまい虎とを捕て後。幾ニ盛ニ。枝日ニ間食を共ニ。たゝ虎い大ニ吼ニ。諸下大矢田ニ後陣ニ。放ちて漏を防ぐ。軍中へ拉いりまふぞ。倭軍い大ニ怖ま惑ひて。一陣敗ぬ及ひ。烏賊津連援兵として。大ニ夫賊を悩ます。竟ニ勝ことを得ざりと記せり。然ることも実記を按ずるニ更ニ合戦の事実を載せず。その是非孰とも辨へがたし。故ニそのことを挙て後考を俟のこのみ。前文ニ大矢田と留て新羅を守らしむ。一説ニ新羅ニ留て。後歩ることを。死さりしい大三韓真鳥くまを後とまふ代らしめて。新羅ニい千熊長彦百済ニい斯摩宿禰高麗ニい葛城の襲津彦。この三人を宰とす。留めおくことをえざり。但日本紀ニ曰く宰い今持天皇之御言故ニ美古止毛知と列ぶ。

崇神天皇第一皇子
豊木入日子命四世の孫
荒田別命の子也
上毛野下毛野君等の祖

田道者

人皇十七代　仁徳帝の時の人
嘉永六丑迄　千四百七十五年ニ成

田道

仁徳時討新羅有功其後攻蝦夷不利戰死其霊化成蛇夷人來過者多被毒殺

按ずるニ人死ぬれば魂散ず。その迹ありのい常理なり。然るニ田道ごとき死後霊を現して。儻を報るのい何ぞあらん。或説ニいはく。魂魄の大虚ニ飯る。死後霊を現して。儻を報るのい何ぞあらん。或説ニいはく。魂魄の大虚ニ飯る。遷迷ニ紛れ。たとへば燈烟衝上て。漸くニ空ニ去るがごとし。煙魂疑滯する処厚きものい遅く落ちるのい迷ー。故ニ桂贏病死の者い魂魄尽て方ニ死ぬれば迷ニ散ず。その死然を得ざるがゆえに。辛ニ消耗せず。精結して妖ごとをいへり

田道の話

仁德天皇五十三年夏五月。新羅頃歲朝貢せず。故ふ上毛野君祖竹葉瀬と之新羅ふ往しめ。その罪を問せめ。然るふ竹葉瀬途ふ於て。一頭の白鹿を得たり。之を祥瑞の獸なりとて。捕へ還りて天皇ふ献る

按るふ延喜式祥瑞の篇ふいへり。白鹿は仁鹿なり。以て祥瑞とするは。天皇の仁德天ふ達し。その應を顯はせるなん

かくて三月を更め。新羅へ玉帛を朝貢の闕ける故を問明むるふ。かの使人皇命ふ順はず。ふを拒むを為りて。その由具ふ奏問しけるに。天皇大ふ怒らせるは。竹葉瀬の罪なり。田道ふ命じて彼処へ往しむ。若新羅いよ〳〵距まば。兵を挙て伐べしと精兵を授けらる。田道ふ之を領承して。筑紫へ船を浮べて。新羅の国へ赴くふ。果して加羅の人ふ叛き田道を来るなりと。攻て堀を深くし。壘を高くし。合戰の准備をなす。田道ふ夫と是

けるに。三軍ふ令して。陣を浚して進ふ控へ。故の動靜を窺ふふ。更ふ戦ひを挑まず。彼方も妄ふ動きを動きず。対陣すること数日ふ及び。卑怯の若武者等ふ。退屈の色見えて。なほ故の如よし。一戦ふ消潰しつる日本の武勇のみを示さんのと待莫きふ。一夜風雨の烈しきふ乗じ。夷賊卒ふ告めさて。田道ふ陣を襲ひ。破撃夜撃を入されこの周章狼狽大方なるに。馬よと言る間ふ夷賊ハ得さうと陣中を四面八方ふ馳荒。営内を幸ひ切さる。若是ど田道ふ軍兵元来一人當千の兵なれば。迷ふ紛と為て。敵ふ対ひ命を惜まず防ぎ戦ふ。田道自ら弩を執て陣ふ跳て出。新羅の將と戦ふ。二十余合ふして勝負を決せず。かくて夜ふ東方白み。明日ハ新羅勢ハ金鼓を鳴し。城中へ引揚る。之を牧筒度の戦ひふ労せしを更ふも逐ず。相引ふの人陣を取て。疵負死人を点検するふ。ふの外ふ夷軍ハ大ふ力を失ふ。新羅勢其機を察し。更ふ戦ひを挑むを。夷軍ふ敗て奏撃を為す。新

田道が矢
巨蛇となって
東夷を
噛ひ戮す

羅の方ゑも秘術をそゝ方使を変て戦ふやどゑ何時果べしとも思はゞ田道熟おもふ
ゝこの分ゑて月日を送らば高麗百濟の両国より援の兵来るゑ於ては戦ひ難かるべ
きつ且く軍を往めゝ方の士卒の英気を頼ひ施策の兵をも拓くべしと陣を弱ゝし固く守
りて出合ひゑ方て新羅の軍兵倭兵ハ取ゑ見らびと侮て。且く戦ひを挑やども倭軍ハ
も猶やかゝつてその陣所をうち護る當下新羅の雑兵一人味方ゑ後をゆくとゝて田道急ゑ
軍監ゑ命ト渠を捕へんゆ来ることのうち早く軍監ハ馬を乗して雑ゑ捕へ田道をゑ引き
帰る間道ハ渠ゞ縛を自うゝ解て大ゑ痛ゆ。さて軍中の消息を問ゑかの雑人答へていゝ。
我軍ハあハ百術とゝ三韓云双の勇気の者あり。ちの頃続て勝利をゑたゝかの百術ゞ軍既
あり常ゑ陣の右を護ること是を避て戦ひのゝ必勝ゑゝんとゝを田道ハ渠を厚く賞し且く陣
中ゑ止めゝ既依軍中ゑ令を傳え敵の出ることを候処ゑ果て夷狄備をゝ人間を揚て鋭ひきさる倭
軍も是ゑ聞を合せ逆兵勝て五百餘騎。新羅の陣の右を撃ゑ於てかの百術士卒を率

て池出つ右ゑ逐詰め左ゑ衝て奮撃突戦透間もゑ折こそゝみをと殿後を勝ゑ縁て倭ゑ
備へゝ。千五百餘騎を共四ゑ分て田道自うゝ中央ゑ備へ新羅勢ゞ陣の左へ妄三妄三ゑ攻
て。苑を面も揮ゞ打てかゝをゞ夷狄大ゑ狼狽して雲時ハ挑を防くゝのゝ倭ハ敗して引
退く。田道ハ急ゑ下知ゑ狄なり此れの諸を彼処の切所へ逐苑逐詰数を斬て時の間ゑ
三千餘級を得て程数日勝誇つゝる新羅勢も今日の軍ゑ味方大半撃ゝ逐ゝ流中
へ逃込む狄猶附入て一挙ゑ滅を屠らんと勝ゑ乗ゝる。倭軍透さゞ逐やどゑ三韓ゑ
名を得一百衝も終ゑ討死をゝうけゝ其餘の賊ゑ或ハ降人ゑ出けるゑを
新羅忽地平定かの降人を後陣ゑ引ゝ昔のゝゞ皈系のけゝ。帝感涙ゝゞ厚く
恩賞を行ゝる。終ゑ五十五年ゑ崩て。蛇夫数て授乳を周へゝ田道ゑ命ゝ。ゑを
撃ゝゑ田道命を得て進発ゝ陸奥へ赴くゑ蛇夫ハ官軍の下向をゝとゝ
及び東の諸国と牒ゝ合せ防ぎ戦ゑ准備をゝ。景行帝の詔ゑ蛇夫ハ元来驍勇ゑ

草木隙なしと云ふ入る君臣父子の差別なく荒夷なるふり謀こそ拙なけれ。射れども突ども縛とも生せば死生不知の兇賊なれば田道も殆攻徳にて暫く軍を緩めつ熟思ふ所の策のやく敵地へ深く責入て元より土地の案内知らず。若前後より狭き所を撃れば進退の度を失ふべし。若し一まつ陣を引て敵の虚を窺んかと遽かこと引退き下総の国小屯なる蛤下蛇夷大に起て上総の方に在とき。まつ其賊を平げて後陸奥へ向むと諸軍小下和して上総へ赴きなれば敵方の夷賊ども蝋のやくに聚まり田道が血気の猛なるを烏合の草賊なれば利鋒を仮て麻売て薙ぐやうに撃とも〳〵泳揩ふ崩るといふ。敵溪とまいえ。で流れる泉のやく尽〳〵もあれば頭を出すいろ撃を放ちかけて夷撃と云ふ。田道が公剛なるとも金石の身にもあらず進む敵を夷とうけて流る血ありいと急なり。故郷へまで敗ぐべき道なれば伯の綿と云ふまでに赤く染まで縛とも世に四角八面に砍ふて

威勢宛然仙人王の荒るる如く牙を噛み髪逆立て飛るのごく奮撃突戦なれども従弟多く討死まで他に援る兵なく。竟に礼軍の中に命を隕す夷賊いよ〳〵勝に乗て田道が陣を踏破る大勢既に討死さて一軍兵等右往左往に散乱て頼に軍に強まりかくて従卒主君なる田道が屍を収むるに〳〵多く纔に射芸の真和名多未峡と把て蓮に落伸び。屍を田道が妻に與へ討死の事を告ーの妻は大に悲こ歌きを縋て抱きて在けるが頓て猛まて死さりける見る人貞烈なるを賞てとまで為に涙を流さるるのみ。さて田道が空き屍は一人一塊の石に封ー印の松を植ておけるが夷賊なこと民なりも。渠が為めにとく〳〵親族多く討れる。屍を東出ー若くして。その然こと嘆さんと数百人も集ひ執て田道が家を掘さそその屍を掘出に不豈計らんや隧より丈尋なる巨蛇あるを火鏑を吹て眼を怒らしに集令ー蛇夷等式ひい作ひ式ひい蕈に式い毒気を吹かるるに。勝ふとめ死逃んと

ものど。五體疎ふて動うごかず。ときに吾くの作を伏して。命を助うるもの両三人遍きて
ものを信ずるの死を繼て恐きものあり。ものどび志の剛なるもの。既ふその分い死せりとい
ども其絶止ものて儀と報ずる。古今ふその例少なからず
按ふ日道蛭夷が擊軍敗きて。伊寺水門ふ死きと。日本書紀ふ見えたり。伊
寺水門い上総ふ夷潢郡とある人いへり

日本百將傳一夕話 卷之壹終

君玉堂蔵板